

大学学士レベルにおける通訳翻訳課程

—アンケート・インタビュー調査による神田外語大学生の認知分析—

柴原智幸 小坂貴志 朴シウォン

(神田外語大学外国語学部英米語学科)

The purpose of this study is to investigate the translation and interpretation program at Kanda University of International Studies, by looking into its present status and the future avenues. The primary goal of the program is to educate the students for knowledge in various topics in humanities and for competitive abilities in English as well as Japanese. In order to examine how the students perceive the program fulfilling such a goal, we surveyed and interviewed the students regarding their perception of the program structure, classes, facilities, study-abroad requirement, and other aspects of the program. The findings suggest that students are generally satisfied with the program contents, but there are areas that can be improved by making the program structure more flexible. To meet the students' needs, Kanda University is committed to restructure the existing curriculum and hopes to increase the visibility of the translation and interpretation education in Japan.

1. はじめに

学士レベルの通訳翻訳教育は、着実な成果をおさめつつある大学院教育と比較した限りにおいて、一定程度に教育内容が標準化され、その存在が学科や学部を構成する他の科目群に匹敵するであろうビジビリティを持つよう体系化されるまでには必ずしも至ってはいない。本論では、これら背景を説明し、学士課程における通訳翻訳教育を促進する目的で神田外語大学が平成21年度にスタートさせた通訳翻訳課程の現況と今後について紹介するとともに、課程生に対するアンケート、インタビューにより、課程が当初定めた目標がどの程度達成されているかを検証する。

2. 日本／諸外国における通訳翻訳教育の現状

2.1 通訳翻訳教育に関する調査研究

通訳翻訳教育は研究者、職業者育成の目的と密接に関連し、多くの場合、大学院レベルにプログラムが配置され教育がおこなわれてきた。この傾向は諸外国ばかりではなく日本における通訳翻訳教育にも

SHIBAHARA Tomoyuki, KOSAKA Takashi, PARK Siwon, "Translation and interpretation program at an undergraduate level: Survey and interview analysis of students' perception at Kanda University of International Studies," *Interpreting and Translation Studies*, No.10, 2010. pages 243-258. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

同様のことが言え、『通訳翻訳研究』(その前身の『通訳研究』に発表された論文も含む)に発表された研究の中で、具体的に大学(院)名が明示され実施された調査研究で多くが大学院になっている(鶴田、村田 2000; 岩本 2007; 上原 2008; 金 2008)。これは海外における学士レベルの通訳翻訳教育の希少性を間接的に物語るものであるとともに、日本における大学院レベルでの通訳翻訳教育の台頭をも表していることになる。それ以外にも国内の大学で通訳翻訳に関する調査が実施されている(染谷他 2005, 田中他 2007)が、これら調査研究では、設置された授業科目に対する受講生の意識調査をはじめとする基礎データの収集分析がおこなわれているにとどまっている。これらを総合的に勘案した結果導き出される結果として、日本国内における学士レベルでの通訳翻訳教育の状況でも、授業科目として独立して配置されているものではなく、具体的なプログラム(専攻や課程など学部や学科における教育内容の存在がある程度認められているもの)として提供されている教育内容の分析とその効果の評価について研究する段階にあると判断することができる。

こういった研究のひとつの事例としてあげられるのは海外の通訳翻訳教育に関するものである。Beeby (2004)は、1972年にその前身が創設、1992年に学部昇格となったスペインのバルセロナ自治大学翻訳通訳学部における学士レベル翻訳者養成プログラムの言語教育を紹介し、シラバスを設計する上で3つのステップに分け、何をシラバスに盛り込むのかをプリシラバスという概念を用い具体的な教育内容を検討している。大学院における通訳翻訳教育はその前提として言語習得済みである学生を対象にする一方、学士レベルでは言語習得と通訳翻訳教育を同時に遂行する必要があるため、学士レベルにおける教育内容を包括的に論ずるのは、受講生の約8割が授業履修目的として「英語力を高めたい」としている日本のように(田中他 2007)、学士レベルにおける通訳翻訳教育がまさに外国語習得にある状況においては有意義であろう。同じくシラバスを用いた調査研究に茨田(2008)があげられ、日本の大学翻訳教育の現状をシラバス・データベース構築という手法にて調査し、教育内容の分析を試みているが、上記の結論と同様、導き出されたデータによって包括的な分析が可能な一方、これを踏まえてある特定の通訳翻訳に関する教育経験をプログラムレベルで論じようとする段階には至っていない。

以上、先行実施されてきた通訳翻訳教育に関する調査報告を見る限り、包括的な基礎データを収集するという目的が主なものとなっているのは明らかであり、本論では、学士レベルにおける通訳翻訳教育を効果的に推進する目的で、授業科目が単独で配置されたものではなく、学部や学科内においてある一定の履修基準や修了条件が規定された通訳翻訳教育の一例として、神田外語大学外国語学部英米語学科に設置された通訳翻訳課程の事例を調査研究する。

2.2 神田外語大学における通訳翻訳課程の概要

神田外語大学外国語学部英米語学科では、英語能力の向上、キャリア教育の目的で通訳翻訳課程を2009年度にスタートした。同課程は本研究の調査をした2010年度7月現在において、1年生が15人、2年生以降は1学年30人が通訳翻訳課程を受講している。通訳・翻訳関連、及びコミュニケーション関連からなる82単位の必修科目に加えて、一定レベル以上(英検1級、TOEFL600点以上 TOEIC900点以上のいずれか)の英語力、最低半年の学部留学、通訳・翻訳実習、ポートフォリオ演習、修了試験合格をもって修了証の発行となる。これら修了要件をみただけでもわかるだろうが、国内には他に例を見ない本格的な通訳翻訳課程になっている。

英語パブリック・スピーキング	説得力のある英語表現力の養成
英語ディベートⅠ	英語での討論能力および批判的思考力の養成
日本語プレゼンテーション	リサーチ力および効果的情報伝達能力の養成
日本語ディベート	批判的思考力と日本語での討論能力の養成
コミュニケーション論Ⅰ、Ⅱ	コミュニケーション論の基本概念とモデルの学習
メディア・コミュニケーション論Ⅰ、Ⅱ	様々なメディアの理解と活用法の学習
レトリカル・コミュニケーション論	レトリックとコミュニケーションの関連の学習
異文化コミュニケーション論Ⅰ、Ⅱ	コミュニケーションの中で文化が果たす役割の学習
国際ビジネス・コミュニケーション論Ⅰ、Ⅱ	IT 革命後の国際ビジネスコミュニケーションのあり方の学習
日米コミュニケーション論	日米間の国家および対人レベルのコミュニケーションのあり方の学習
日本語表現法Ⅰ、Ⅱ	日本語の文書作成力の向上
日英翻訳法(時事)	時事問題に関する日英翻訳法の学習
英日翻訳法(時事)	時事問題に関する英日翻訳法の学習
英語通訳法Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ	通訳技能およびその周辺知識の習得と学習
英語映像翻訳法	映像分野における翻訳法の学習
コミュニティー英語通訳法	講演などの通訳実践
通訳・翻訳理論(英語)	主な通訳・翻訳理論の学習
時事英語Ⅱ	時事英語と背景知識の学習
通訳演習	通訳・翻訳能力の強化、および実践
ポートフォリオ演習	通訳・翻訳実践の理論面からの振り返り

同課程の最大の特徴は、通訳・翻訳という技能はもちろんのこと、「効果的な語学教育」、「効果的な教養教育」ととらえている点である。すでにある一定程度の言語運用能力を有する大学院生とは異なり、学部レベルの通訳・翻訳教育は、学習者の語学力及び通訳・翻訳技能の向上が同時に必要なことは前述の通りで、そのため1年次からネイティブ講師を中心とした実践的なカリキュラムで英語力を鍛える一方、日本人講師による通訳法や翻訳法の授業を受講して能力の向上に努め、通訳力の基礎固めとして「文法・訳読」の見直しを行い、適宜授業に取り入れて読解力・リスニング力の効率的向上を図っている。この背景にあるのは、「通訳・翻訳力＝英語力＋日本語力＋知識量」という公式であり、日本語での言語操作能力や読書を通しての知識量拡充をはかる方針である。

「教養教育」の一環として欠かせないのが「全人教育」としてのアプローチである。大学4年間を共に同じ課程生として過ごしていく上で、毎日の授業だけではなく、多くの課外活動を通して互いを切磋琢磨していく。一例として、年に数回実施される研修や勉強合宿では、学年をまたがって共に学ぶという態度が育成される。詳細については後述に譲るが、通常の授業でも課題の量は相当なものに加え、課程の授業での準備があるにも関わらず、アンケートやインタビュー結果が示すとおり、課程生の声はもっと課外授

業で共に学べる機会をつくって欲しいというもので共通している。

3. アンケート調査方法、結果および分析

3.1 調査研究の背景、方法

通訳翻訳課程が設置されて2年目に入ったが、教育の成果が具体的に見えてくる一方、様々な課題も認識されてきた。これらの課題を洗い出し、「通訳・翻訳教育を通じた言語教育」「言語教育を生かした教養教育」「教養教育に根ざした全人教育」という目標を達成するための改善へつなげるのが、今回実施したアンケートおよびインタビューの目的である。

調査を行った時点で通訳翻訳課程に在籍していた1年生15名、2年生20名の合計35名(うち9名が男子学生、26名が女子学生)から回答を得た。この調査では、すでに述べたように、この通訳翻訳課程が実際にどれだけプログラムの目標を達成しているかと学生が感じているかという点を明らかにするため、いくつかのセクションに分けた質問項目に答えてもらった。インタビューは成績上位、中位、下位者の中から特定の各学年3名、合計6名に対して各30分程度の調査を実施した。インタビューの内容は、高校生の頃の英語学習について、通訳翻訳課程への応募の動機、通訳翻訳課程に対する満足・不満度、意見、要望など多岐に渡っている。以下、調査の結果をセクション別に報告する。

3.2 通訳翻訳課程への取り組み

セクション1は通訳翻訳課程への取り組みに関してである。実際の質問項目は以下の3つであった。

Section 1: 通訳翻訳課程への取り組み

- Question (Q) 1-1: 授業を理解するために、熱心に取り組んでいる
Q.1-2: 学習に対する意欲は高いと思う
Q.1-3: 課程に対して満足している

表 1-1 と表 1-2 はともにセクション1「通訳翻訳課程への取り組み」の質問に対する回答である。表 1-1 は1年生と2年生の回答を合わせた結果である。「どちらかというと思う」を含めると、ほとんど(90%以上)の学生が「授業を理解するために、熱心に取り組んでいる」(Q.1-1)と回答している。この質問に対して「どちらかというと思わない」と回答した学生は35人中わずか2人(6%)であった。同様に、多くの学生が「学習に対する意欲は高いと思う」(Q.1-2)と回答している。このプログラムへの満足度を問う質問では、31%の学生が「非常に満足」、53%が「どちらかという満足」、16%(5人)が「満足していない」と答えた。

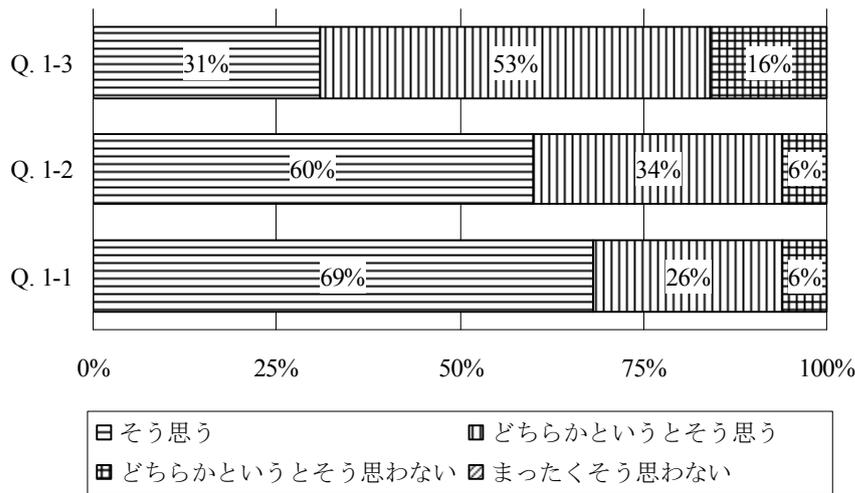


表 1-1. 「通訳翻訳課程への取り組み」に関する3つの質問への回答—1年生・2年生合同(計35名)

1年生と2年生のあいだで通訳翻訳課程に対する認識の差があるかどうか調べるため、回答を学年別に表したものが表 1-2 である。全体的に1年生の方が2年生より通訳翻訳課程に対する満足度は高い傾向があったが、2年生の方がより熱心に課程に取り組んでいることがわかった。一方、2年生のうち21%の学生(4人)が通訳翻訳課程に対して十分には満足していないこともわかった。

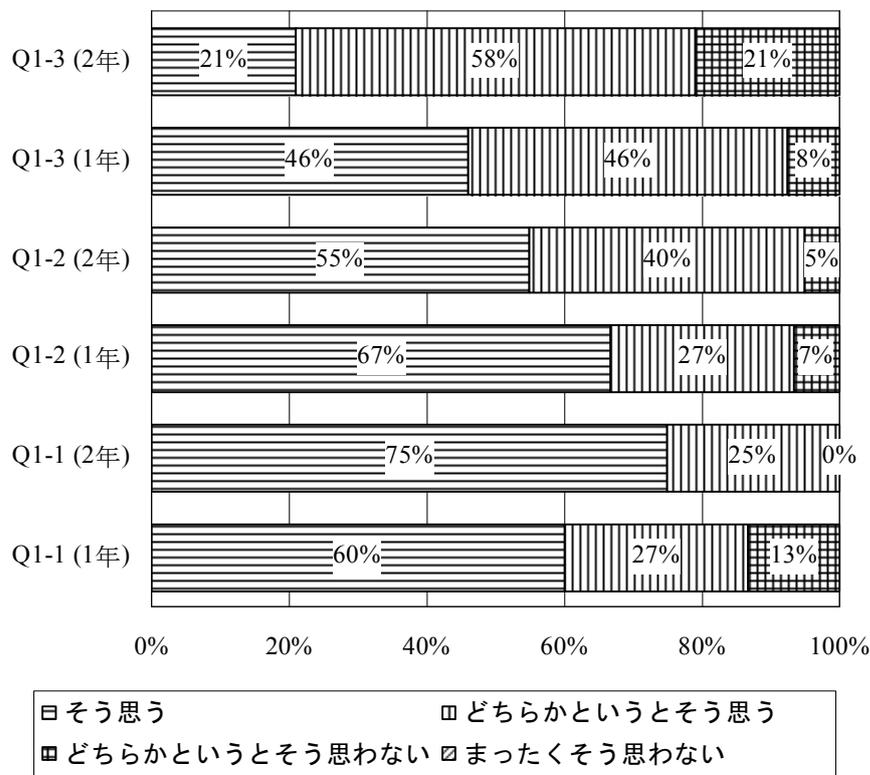


表 1-2. 「通訳翻訳課程への取り組み」に関する3つの質問への回答—学年別(35名)

3.3 授業関連について

セクション1「通訳翻訳課程への取り組み」に引き続いて、セクション2では授業に関連する以下の5つの質問を尋ねた。

Section 2: 授業関連について

- Q.2-1: 自分が期待していたものと同じだ
- Q.2-2: 必修科目数は適切だと思う
- Q.2-3: 教員の人数は適切だと思う
- Q.2-4: 修了のための要件(単位数取得等)は適切だと思う
- Q.2-5: 英語運用能力の向上に役立っている

表 2-1 はこれらの質問に対する1年生の回答、表 2-2 は2年生の回答である。1年生全員が Q.2-1「自分が期待していたものと同じだ」の問いに肯定的な回答をしている一方、2年生の40%(8人)が授業は期待通りではないと答えている。この期待のズレについては Q.2-2、2-4、2-5 への回答にも表れている。1年生はこれらの質問に概ね肯定的に答えているが、2年生はそうではない。特に「必修科目数」と「修了のための要件」に関する質問では、「そう思わない」と回答した2年生が多数見られた。さらに Q.2-5 の回答を見ると、1年生が通訳翻訳課程は英語運用能力の向上に役立っている、と考えているのに対して2年生は1年生ほどそう感じてはいないことがわかる。Q.2-3「教員の人数」に関しては1年生、2年生ともに適切だと認識している。1年生15名、2年生20名という少人数制を考えるとこれは妥当な結果と言えるだろう。

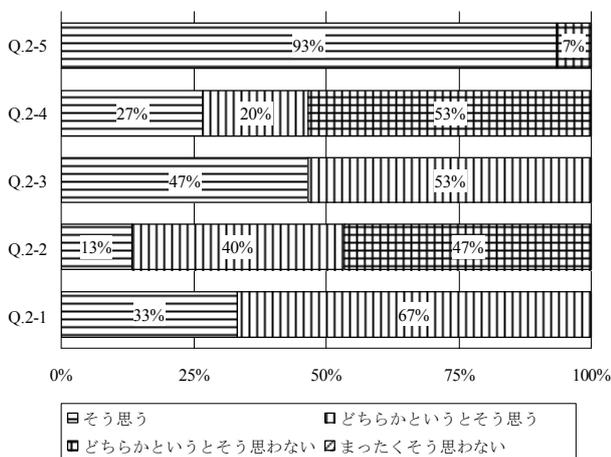


表 2-1. 「授業関連について」の5つの質問に対する1年生(15名)の回答

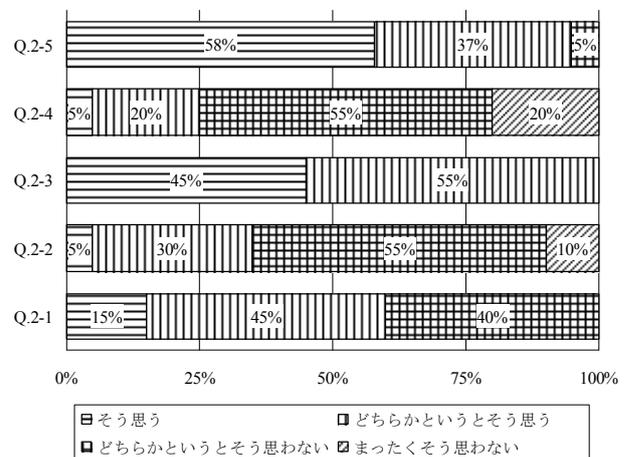


表 2-2. 「授業関連について」の5つの質問に対する2年生(20名)の回答

3.4 学習環境について

通訳翻訳課程の設置・開講にあたり、我々は単に施設面で優れた学習環境ばかりでなく、受講生が協働してお互いに学び合うことのできる環境づくりを目指した。この「学習環境」に関する質問項目は以下

の5つである。

Section 3: 学習環境について

- Q.3-1: 学習環境が整っている
- Q.3-2: 受講生の人数が適切だと思う
- Q.3-3: CALL 関係の施設が充実している
- Q.3-4: 受講生同士から学ぶものがある
- Q.3-5: 課外授業(合宿、ツアー、コンテスト)は刺激になる

表 3-1と3-2がこれらの質問に対する回答である。5つの質問のうち3つの質問に関して、「そう思う」と「どちらかというと思う」を合わせて 100%肯定的な回答を得た。特に「課外授業」に関する Q.3-5 では、1年生と2年生のほとんどが「課外授業は 刺激になる」と答えている。さらに全員が「受講生同士から学ぶものがある」と回答しているのも特記すべき事柄である。受講生同士が協働して学ぶことのできる環境は学習過程において非常に意味のあるものと学生自身が捉えていることがわかる。

一方、「学習環境が整っている」(Q.3-1)に対する回答では、1年生のほとんどが肯定的な回答をしているのに対して、2年生のうち15%(3人)が否定的な回答をしている。さらにQ.3-3の結果を見ると、1年生と2年生ともに一部の学生は CALL 関係の施設に十分満足していないことがわかる。これら2つの質問項目に関しては、否定的な回答に結びついた要因をさらに詳しく調査する必要がある。

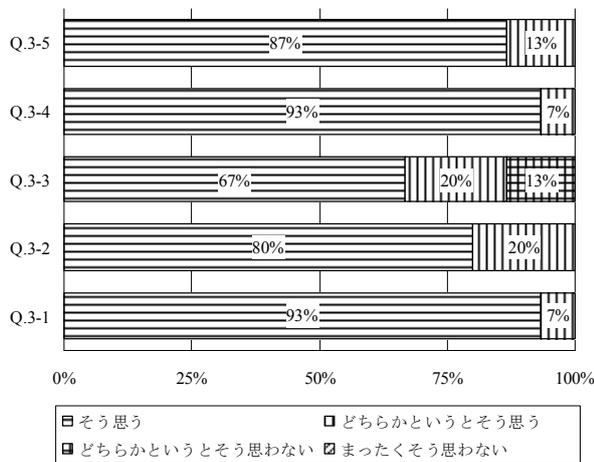


表 3-1.「学習環境について」の5つの質問に対する1年生(15名)の回答

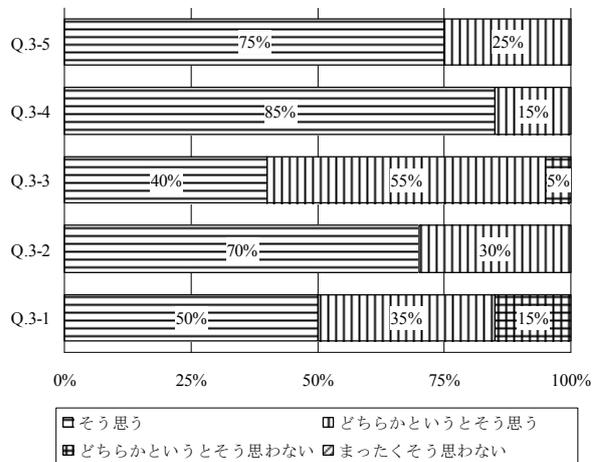


表 3-2.「学習環境について」の5つの質問に対する2年生(20名)の回答

3.5 留学について

通訳翻訳課程においては留学が必修要件となっていることから、この要件に関する受講生の認識も調査した。留学については以下の2項目のみを質問項目とし、後ほど個別のインタビューを行ってさらに詳しく調査することとした。

Section 4: 留学について

Q.4-1: 留学することについて不安はない

Q.4-2: 留学のための選考基準が適切だ

セクション 3 までの肯定的な回答とは対照的に、「留学について」の項目では表 4 に示すように 1 年生、2 年生ともに否定的な結果が見られた。「留学することについて不安はない」という問いでは、1 年生も 2 年生も何らかの不安を抱えていることが明らかになったが、学生とのインタビューでさらに詳しく尋ねてみると、「留学をすると 4 年間で卒業が困難になる」「留学によって就職活動に支障が出る」などの声が上がった。

留学選考基準に関しては回答が肯定的・否定的とに分かれた。その後のインタビューで得られた、否定的な理由として 2 つがあげられる。その 1 つめは、「交換留学」という比較的厳しい基準が設定された留学プログラムへの参加を目指している点である。本論の執筆時点で交換留学が確定している学生は 3 名であり、それ以外にも基準を満たしている受講生はいるものの、その他の課程生は交換留学に足るだけの点数が TOEFL iBT をはじめとする検定試験で取得できていない。次に、これは少数派の意見であるが、特に 2 年生から通訳翻訳課程をはじめた課程生にとっては制約が多いとの意見がだされた。残り少ない学期の中で必修科目数を取得しなければならず、留学も 1 年間行くだけの時間的余裕がない。別のケースでは、1 年次にさほど勉強しなかったために GPA が低く、現時点の数値では交換留学に合格するレベルにない、などの理由である。これらの理由を考察すれば明白であるが、そもそも課程生が留学に足る英語力を持ってさえいれば解決する問題であるため、引き続き検定試験に挑戦し、できるだけ高得点を狙うように促すことが必要である。

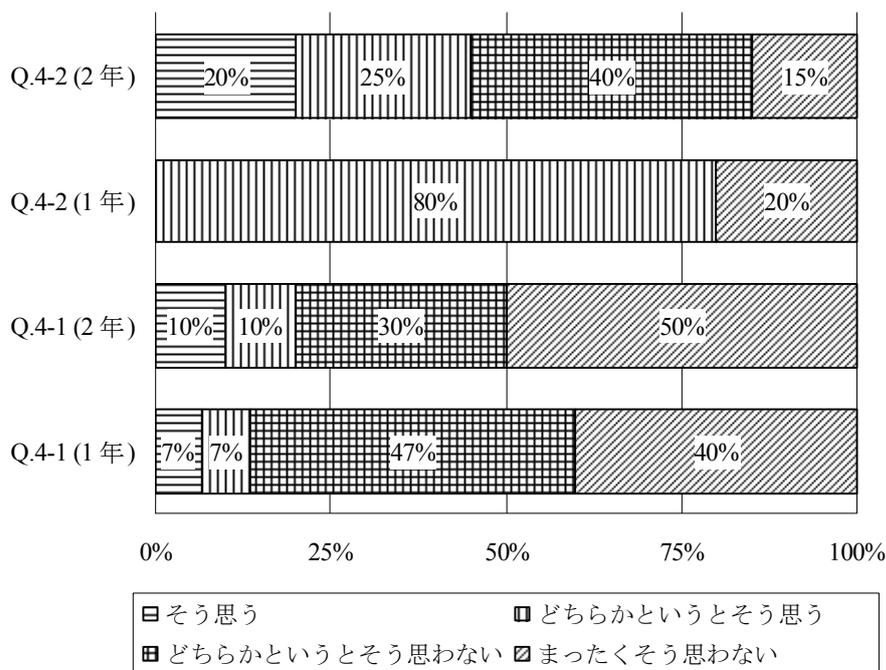


表 4. 「留学について」の 2 つの質問に対する 1 年生(15 名)および 2 年生(20 名)の 回答

以上のアンケート調査の結果をまとめると、受講生のほとんどが通訳翻訳課程の様々な側面－カリキュラムの内容や実際の授業－に関して概ね満足していることがわかった。授業は学生自身の英語運用能力の向上に役立っていると認識しており、学習環境も学習意欲を刺激するのに十分に整っていると感じている。カリキュラムの内容に関しては、課外授業が刺激的だと答え、受講生同士が協働して学習できる環境も学習に役立っていると考えている。しかしながら、卒業までの年数や就職活動に関連した不安を抱いている学生もいることから、今後はそのような不安感を取り除く取り組みが必要であることもわかった。

4. 考察

4.1 通訳翻訳課程の現状分析

アンケート結果の考察に移る前に、教員の間から見た通訳翻訳課程の現状について簡単にまとめておきたい。通訳翻訳課程の課題は、大きく分けて学生の「学び」全般に対する姿勢に関するものと、制度上の2つに分けることができる。前者に関しては、さらに知的視野の狭さと、能動的な学習意欲の不足2つに分類することができるだろう。実際に学生を指導していると、特に学生の知的視野の狭さが通訳・翻訳の指導の障害になっていると感じられることが多い。大学入学時における学生の知的好奇心の対象はそれほど多くなく、特に外国語の単科大学という特性からか、言語以外への興味が薄い。通訳や翻訳は様々な分野を扱うために、あらゆることを広く浅くカバーしておく必要がある。このため、まず学生の知的視野を広げ、知的好奇心を涵養していくことが急務と考えている。

高校までの「テスト」を軸にした学習習慣のためか、全てを「評価されること」に結びつける傾向がある。このため、課題は無理をしてもこなすが、それ以外はほとんど何もしないという状況が顕著である。この状況は、自主的に勉強に取り組むことに消極的な態度につながり、特に通訳の授業において大きな問題となった。通訳は事前準備が非常に重要だが、これは普通の課題のように明確に作業対象を特定できないため、学生としては積極的に取り組みにくく、結果として不十分な準備で通訳に臨んで不完全な通訳をせざるを得なくなったようである。通訳や翻訳をする際には通訳者・翻訳者の側に「何とかメッセージを伝えたい」という意志があることが重要だが、これも「出来なければ評価が上がらないというだけ」という安易なあきらめの姿勢が目につき、改善のため相当の努力を傾けている。

一方、制度上としてはカリキュラム上の問題が多い。通訳・翻訳教育が専門ではない担当者がカリキュラムを決定しなければならなかったという事情があるため、全体的にコミュニケーション理論に比重がおかれた必修科目の配置となっている。通訳・翻訳そのものを指導する授業とコミュニケーションの理論と実技に関する授業の比率は、ほぼ1対1となっているが、「パブリックスピーキング」、「プレゼンテーション」などコミュニケーション実技に関する授業はともかく、コミュニケーションの理論に関する必修授業が多いのは、学生たちの負担になっているように担当教員として少なからず感じていた。一定水準以上の言語能力を身につけた学生に対する大学院での通訳・翻訳教育とは異なり、学部における通訳・翻訳教育には「通訳教育・翻訳教育と平行して、起点言語と目標言語のトレーニングを行わなくてはならない」という条件が加わる。不十分な言語能力のままでは、形だけの通訳・翻訳演習となる恐れがあるからである。前述の通り、「通訳力・翻訳力＝英語力＋日本語力＋知識量」と定義づけたが、この3つの要素から外れる授業に関しては、学生たちは積極的な受講の意志を持ちにくいのではないだろうか。

さらに課程の修了要件として義務付けている留学についても大いに改善の余地がある。本来は1年の留学を義務付けていたが、通訳翻訳課程の必修単位数が極めて多く、さらに留学先での単位修得には

上限がある(1年間で30単位ほどで、通常の1年間の取得単位数のほぼ半分となる)ため、すでに修了要件を「半年から1年の留学」と改めた。しかし交換留学先の圧倒的な不足(交換留学以外の選択肢の場合、学生の金銭的負担が極めて大きい)、就職活動の出遅れへの懸念などから、学生が不安を抱きがちであると認識している。以上、担当教員の立場からまとめられる課題であるが、果たしてこれら課題が学生の観点からしてどの程度共通するのか、またどの程度深刻な問題なのか、さらにその背景を考察する。

4.2 アンケートの考察

4.2.1 セクション1「通訳翻訳課程への取り組み」

1年生の方が通訳翻訳課程に対する満足度は高いが、2年生の方が取り組みは熱心だという結果が出ている。これは現2年生がパイオニアとなって必死に努力してきた結果、留学の年限などをはじめ様々な制度修正が行なわれた結果を、1年生が享受していると見る事が出来る。2年生は留学や本格的な通訳・翻訳への取り組みを開始している分、熱心に取り組んでいるのであり、その分不満な点が目に付くようになってきているということでもある。通訳翻訳課程はまだ未整備な面が多いことを考えると、いずれは1年生も同じ傾向をたどるものと思われる。

4.2.2 セクション2「授業関連について」

2-1の「自分が期待していたものと同じだ」(2年生のみ)、2-2の「必修科目数は適切だと思う」、2-4の「修了のための要件(単位数取得等)は適切だと思う」に関して、「そうは思わない」という回答が多かった。

2-1は、現2年生が新入生だった通訳翻訳課程初年度に募集をかける際、事前に十分な周知徹底が図れなかったことと関係がある。課程設置の際に想定されていたのは、秋田県にある国際教養大学で行なわれているような、極めて高い英語力を持った学生に対する通訳・翻訳教育であり、そのような学生を集めるために、新入生に対して早い時期から呼びかけが行なわれる予定であった。しかし諸般の事情から受験生・合格者に対する十分な周知が図れず、結果的に入学式直前の説明会で応募を呼びかけ、それから1週間ほどで選抜を終えることになった。結果的に新入生の中でも特に英語力が高かった層からは期待していたほど応募がなく、選抜された学生も通訳翻訳課程に対して様々なイメージを抱いていたのである。これに対して現在の1年生は、大学のウェブページや入試広報部などからの情報も十分にあった上に、説明会に2年生の代表が参加してくれたため具体的なイメージが掴みやすく、そのような差がアンケート結果に反映されている。

2-2に関しては、やはり必修科目数が過大であることが分かる。さらに2-4も両学年ともに不満が高く、特に2年生では8割近くが否定的な意見を持つなど、1年生に比べてより現実に直面している分、深刻な不満があることが明らかになっている。

4.2.3 セクション3「学習環境について」

このセクションに関しては、満足度はおおむね高い。しかしCALL施設に対する不満がある点が若干意外な感を受ける。確かにシステムの安定性に問題があるとは言え、それほどCALLに依存した授業を行なっているわけではないため、実質的な問題はほとんど生じていないはずであり、純粋に技術的な問題なのか、授業の運営方法に問題があるのかは今後見極めていく必要がある。

4.2.4 セクション4「留学について」

このセクションに対しては満足度が非常に低く、大きな問題を抱えている。詳しく見ていくと、学生側の意識改革が必要な点も多く、留学することについて不安があると答える2年生だが、その一方で再三にわたる呼びかけや説明会の実施にもかかわらず、TOEFLなど留学の際に必要な資格試験の準備が進んでいない。インタビューでも判明していることだが、主な不安は交換留学枠が十分でないことだという。それならば少しでも高い資格試験のスコアを狙い、学内選抜を通過する努力が必要なのではないか。インタビューで「留学をすると4年間で卒業が困難になる」「留学によって就職活動に支障が出る」などの声があったが、「留学」と「卒業」「就職」を天秤にかけること自体がおかしいという考え方もあってよい。卒業や就職が遅れても、それに十分見合うような「学び」にしていくという意識が大切なのではないだろうか。

これに関しては、通翻課程の中での「留学の位置づけ」を見直してみる必要性もあるだろう。単なる「資格の形式」「箔付け」のような位置づけであれば、就職活動を優先するという考えが出てきても不思議ではない。

4.2.5 自由記述「満足な点」

1年生の記述を要約すると「学びを促す授業、クラスメート、先輩の存在」に満足を感じており、2年生に関しても「学びを促す授業、クラスメートの存在」に満足しているなど、課程全体が環境からプラスの影響をうけていることが分かる。特にお互いから学びあう気風が醸成されていることは大きい。この点に関しては思ったよりも学習に対する態度は消極的ではなく、この雰囲気は今後も維持して行きたい。

4.2.6 自由記述「不満な点」

1年生、2年生ともカリキュラムの不備(必修授業が多すぎる、必修授業の中に履修の必要性を感じないものがある)に関する不満が多かった。また、2年生が留学制度の不備を挙げたのは予想できたが、1年生から、合宿や見学などの授業外の活動の際の交通費・宿泊費がかかりすぎるという声が複数挙がったのは意外なことであった。出費があること自体は事実であるが、例えばフリーランスの通訳・翻訳者を勉強合宿に同行させる場合、費用がどのぐらい高額になるかを考えれば、それほど不満を抱くにはあたらないうような考え方を提示していく必要がある。

4.2.7 自由記述「向上させたいスキルや分野」

2年生は、「英語関連」が9件、「教養関連」が8件、「日本語関連」が4件という内訳であった。英語関連と教養関連がほぼ並んだことが非常に意義深い。2年生が、通訳・翻訳を行なう上での知識量の大切さに気づいた。1年次から強調し続けてきた「知的視野を広げ、知的好奇心を涵養すること」という呼びかけが、ようやく実を結んできた。

それに対して1年生は「英語関連」が11件、「日本語関連」が3件、「教養関連」が1件という内訳である。これは「不満な点」で「授業外活動の際の交通費・宿泊費がかかりすぎる」という声が挙げたことともリンクしていると考えられる。通訳・翻訳を行なう際に知識量がどれほど重要な役割を果たすかが、十分に認識されていない。

その一方で、大学院における通訳・翻訳教育と学部における通訳・翻訳教育の関係の縮図のようなものが、2年生と1年生のアンケート結果に反映されているとも読み取れる。2年生はある程度言語能力が高まってきたために、それ以外の分野に目を向けているのに対して、1年生は言語能力が不足しているために、「何をにおいても言語能力を高めねば」という意識になりがちなのだろう。言語能力を高めること自体は問題ないのだが、それと平行して知識量強化が行なえるようにする必要性がある。

4.2.8 「希望や要望」

2年生からは「カリキュラム整備(必修授業の数と内容について)」「留学制度整備」「通訳翻訳専用研究室の設置」などが出ている。前者2点に関しては既出だが、3点目が興味深い。教職課程の学生用に設置されている勉強スペースのようなものが欲しいようなのだが、条件の一つとして「泊り込みが出来る」ことが挙げられている。国際教養大学のように全寮制かつ図書館が24時間開館しているというような環境は望めないにしても、それに近い学習環境を学生が自主的に求めてきたことは、今後検討に値する。全寮制のもとで徹底した語学教育と哲学などを中心とした教養教育を行なった旧制高校的な「学び」へと、学生たちが先祖がえりしつつあるのかもしれない。

1年生からは、2年生同様「カリキュラムの整備」「留学制度の整備」を求める声に加え、やはり「通訳翻訳課程専用の勉強部屋が欲しい」という声が出ている。インタビューなどで確認したところ、概ね2年生の「研究室」と同じ意味合いのようだ。現時点では、学生のこのような要望に対して、通訳翻訳課程コーディネーターを務める教員が研究室を可能な限り解放することで対応している。

また、「授業外の活動(合宿、見学など)をもっと増やして欲しい」という声がある一方で「授業外の活動の費用を援助して欲しい」という意見もあるなど、教養教育に対する意識が芽生える過渡期にいらしいことがうかがえる。

4.3 インタビュー調査結果と考察

全体的な傾向としてはアンケートと同様だったが、インタビュー独自の意見もあった。

2年生からは、勉強会への2年生の参加を呼びかける意見があった。この勉強会とは、4月から2年生の在籍生2名が自発的に始めたもので、英語の子供用百科事典を読み、ディスカッションをした上で内容に対する感想を述べ合い、それを通訳するという内容である。本来は参加者が持ち回りで勉強会をリードするのが望ましいのだが、現時点では2年生が1年生を指導するような体制になっている。発案者の学生2名は、教えることが良質の学びに直結することから、「悪い意味で必要なこと以外やろうとしない」他の2年生にも参加を呼びかけているのだが、反応は芳しくない様子である。

これに対して「自分が集中したい分野とは違うので参加しない」という声も、やはりインタビューにおいて2年生から出ている。また、インタビューした1年生からは「2年生が1年生を教えるという形式なら授業と同じ。それなら出る意味がない」という声もあった。

担当教員としては、このような「相互に教えあうことを通した学びの場」は積極的に生かして欲しい。「課題が忙しいので勉強会には行けない」という学生もいるようだが、勉強会はわずか1時間である。参加したところで課題をこなす時間が大幅に減るわけでもない。「自分が集中したい分野とは違う」からこそ、自発的には学ぶことがないことを学びに、勉強会への参加が必要になるはずである。そのような意識改革を求めたい。

2年生、1年生ともに「合宿は非常に良かった。もっとやって欲しい」という声が挙がっている。合宿では在籍生をいくつかのグループに分けて特定の分野に関してレポートを作成し、それを日本語と英語で発表したものをさらに通訳する、という活動を行なった。これが自分ひとりで行なう学習を、量的にも質的にも遥かに凌駕する経験につながったことが、好印象を与えた理由であった。

さらに、必修科目の数の多さには、両学年から不安の声が挙がっている。それに加え1年生からは「課題が多く辛いという」意見が出ている一方で、「課題の多さに慣れてきた。2時や3時まで勉強するのも平気になってきた」という声もある。

以上がアンケートならびにインタビュー結果に対する考察のまとめである。当然のことながら、担当教員が抱く課題を反映しているものもあれば、予想しなかった結果となっていた項目もあった。これを踏まえ、神田外語大学の通訳翻訳課程がさらに充実した内容を提供するにあたって、本通訳翻訳課程のモデルともなっている国際教養大学の取り組みを参考にしてみたい。

4.4 国際教養大学の取り組みから考察

2010年7月27日に神田外語学院で行なわれた英語教育公開講座で、国際教養大学の中嶋嶺雄学長が「グローバル時代の大学英語教育の在り方」と題した基調講演を行ない、今回のアンケートおよびインタビューの内容と絡めて非常に示唆に富んだ内容であった。同大学では、教養教育、中でも芸術科目を重視しており、アメリカのリベラルアーツ・カレッジでは、芸術系の科目も必ず組み込まれている。科学系の科目(生物、物理、化学)、また、人口学、安全保障、宗教学、平和学など、社会系の科目も必修としている。TOEFLは1年次で500点を取らなければ進級、留学できず、500点をとった上で、アカデミック・リーディングやアカデミック・ライティングを教えている。生活面では、全寮制で、図書館は24時間開館しているため、好きなだけ勉強ができるとのことである。留学に関して、交換留学先は100校以上あり、なるべく一つの大学に集中しないように配慮している。交換留学の交渉には、専任のスタッフを雇用しているほか、学長も直接出向いて交渉するなど積極的にあたっている。交換留学であるため、50万円台(国際教養大学の学費)での留学が可能となる。

全体的にいえることは、通訳・翻訳教育をおこなう上で理想的な状態にあるということである。特に徹底して英語力をつけた上で、アカデミック・ライティングやアカデミック・リーディングを指導している点は非常に効果的である。

通訳翻訳課程の1年生が、英語力が十分についていない状態でそのようなタスクを課されたり、プロジェクト型の課題に取り組みされたりしており、インタビューでも、「もっといろいろと学びたいが、課題に時間がかかりすぎて学べない」という声があった。このような点に配慮すると、より効率的な学習が可能になり、学生の負担も軽減される。

また、十分な英語力をつけてから留学をさせている点も特筆に価する。神田外語大学の場合、キャリアセンター(就職部)の学生に対する影響が非常に強く、「留学するなら、なるべく早く行かないと、就職活動に支障が出る」、「何が何でも4年で卒業しなくてははいけない」という考えが学生の間で支配的になってしまっている。それも一面の真理ではあるが、まず「より良い学び」を目指した留学指導があつてしかるべきである。国際教養大学のように、4年間での卒業にすらこだわらず、卒業を延期して学び続けようという学生の姿勢がぜひとも欲しい。

「教養大学」の名に違わず、実に豊かな教養教育を行なっている点も通訳・翻訳教育の環境としては理

想的である。特に外国語系の学部に進学する学生は、文系であることが多く、理系の科目に関しては疎い場合が多い。甚だしい場合は、専攻する外国語そのものと、その文化的背景以外はあまり興味がないという学生も、それほど珍しくない。そのような状況に対してバランスをとる上でも、科学系・社会系の科目を重視していることには、大きな意味がある。

4.5 考察のまとめと今後の取り組み

考察の前提となった問題には、「知的視野の狭さ」、「能動的な学習意欲の不足」、「カリキュラムの不備」、「留学体制の不備」などがあつた。

アンケートとインタビューをおこなった結果判明したのは、「知的視野の狭さ」に関しては、学年を追うに従って改善されているということである。

「カリキュラムの不備」に関しては、予想していた以上に問題は深刻で、早急な対策が求められる。中でもコミュニケーション理論関連科目を中心に必修科目の単位数削減をおこなうことが望ましい。その一方で、国際教養大学を範にとり、科学系・社会系・芸術系の科目を必修科目として組み入れることができれば、知的視野を広げることにもつながり、理想的である。

通訳・翻訳においては事前に様々な勉強をおこなって背景知識を強化することが非常に大切である以上、必修科目だけではなく、できれば課題も減らして学生が自発的勉強に当てる時間を捻出できるようにしたい。そのためには、英語力がある程度完成してから課すのが望ましい課題を見極めていく必要もある。

「能動的な学習意欲の不足」に関しては、通訳翻訳課程在籍生が相互に刺激あつているとはいうものの、教える側としては意欲のある者とない者の二極分化が進んでいるという印象がある。前者と後者の比率は1:2というところであろう。

能動的な学生は、勉強会を主催したり、インターネットでポッドキャスト(7月28日現在、第6回まで配信し、そのうち1回はオールイングリッシュ)を配信し始めたりしている。さらに博物館に行って学んだ情報を在籍生用メーリングリストで配信したり、留学生と積極的に交流したりといった活動をしている学生も複数名存在する。また、2010年8月には初の学生主導の通訳合宿がおこなわれ、9月には学生からの申し出を受け、2日間に渡って文法力強化セミナーを実施する予定になっている。

しかしその一方で、通訳・翻訳を通して「メッセージを伝達する」という行為にあまり情熱を見出しておらず、ひたすら課題をこなし続けるだけの学生が、上記のような能動的学習をおこなっている学生以上の数存在することも事実である。

2年生に関しては、「能動的な学習を」と1年以上言い続けてきており、基本的に「なるべく長く在籍し続けてみよう」というスタンスで接してきた。しかし、3年生に進級するまでのおよそ半年以内に学習姿勢が抜本的に変わらない場合、通訳翻訳課程の履修中止を勧告した方がよいと判断する学生が出る可能性もある。

「留学体制の不備」に関しては、まず交換留学枠を拡大させる一方、「通訳翻訳課程にとっての留学とは何か」という位置づけを明確にする必要がある。語学留学は認めず、正規の学部留学しか認めないという方針である以上、単に「語学の習得」が留学の目的ではあり得ない。そうなると必然的に教養教育的な比重が増すことになる。

また、留学を義務付ける以上、大学側からの何らかの資金的援助もあることが望ましい。国際教養大学

の場合は、基本的に学生が余分な授業料を支払う必要性がないからこそ、学年全員の留学体制が成り立っていると見える。金銭的な理由で、通訳翻訳課程の履修を諦める学生を出してはならない。援助は資金面だけではなく、留学がある程度就職活動によって影響されるのは仕方のないことではあるが、将来的にはそのような影響を受けない制度作りも視野に入れていく必要がある。

一例だが、大学院に通訳・翻訳課程を設け、学部と一貫教育をおこなうような形も十分考えられる。すでに東京外国語大学が学部と大学院を連続した5年制の課程を設けているが、学びの時間をできるだけ長く取るという観点からも、入学時の学生の学力の差という観点からも、神田外語大学では4年+2年の6年体制を取ればと考えている。一貫制は何も学内に限らず、国内や海外の他大学院との関係作りの中で構築できるものである。その意味でも、世界の大学院レベルの通訳・翻訳教育機関と提携していければ理想的である。

5. おわりに

これまでの日本の大学教育においては、少なからず通訳翻訳(的)教育がおこなわれてきた事実を否定する者はいない。「原書購読」、「作品批評」といった講義や演習が多くの場合訳読式にて教授されてきたことをも含めて考えると、通訳翻訳は大学教育の教授法を支えるひとつであり、知識を吸収するために幅広くかつ積極的に活用されてきた。通訳翻訳を銘打った授業科目も配置されるようになって時は久しく経ち、現在では通訳翻訳に関係する授業を持たない大学は少数派であるとしても過言ではない。

本論では、このような通訳翻訳教育の普及を土台にして、神田外語大学外国語学部英米語学科が2009年度に設置した通訳翻訳課程の現状分析をおこない、課程生へのアンケート、インタビュー結果と照らし合わせながら、担当教員自らが抱く課題がいかに関課程生に共有されているかを考察した。歴史が浅いゆえの試行錯誤も多々あるが、着実に課程生たちが学んでいる姿を目にするのは教員冥利に尽きる。今後は、本論で指摘した課題について取り組んでいくことに加え、すでに学問的・教育的成果をあげている国内並びに海外の大学・大学院との関係の樹立をも計画に入れ、引き続き教育的活動をおこなっていきたい。

.....

【著者紹介】

柴原智幸 (SHIBAHARA Tomoyuki) 神田外語大学外国語学部英米語学科。バース大学大学院通訳翻訳コース修了。英国 BBC 放送通訳、青山学院大学、獨協大学、立教大学非常勤講師を経て、現在に至る。専門は、通訳・翻訳教育。

小坂貴志 (KOSAKA Takashi) 神田外語大学外国語学部英米語学科。デンバー大学人間コミュニケーション研究科修士課程修了、博士課程単位取得終了満期退学。モンレー国際大学院大学、立教大学を経て、現在に至る。専門は、異文化コミュニケーション論。

朴シウォン (PARK Siwon) 神田外語大学外国語学部英米語学科。ハワイ大学マノア校にて博士号取得。韓国ヨンサン大学専任講師を経て、現在に至る。専門は、第二言語習得論、心理言語学、言語能力評価/測定。

【引用文献】

- Beeby, A. (2004). Language Learning for Translators. In M. Kirsten (Ed.), *Translating in Undergraduate Degree Programmes* (pp. 39-65). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 茨田英智(2008)「シラバスにみる日本の大学翻訳教育の現状—「シラバス・データベース」の構築と分析—」『通訳翻訳研究』第8号: 299-307.
- 岩本明美(2007)「北京語言大学日中同時通訳修士課程における通訳実習の特徴と課題」『通訳研究』第7号: 231-251.
- 上原みどりこ(2008)「タイの大学院における通訳翻訳教育の現状と動向」『通訳翻訳研究』第8号: 337-354.
- 金静愛(2008)「韓国における通訳翻訳教育 韓国外国語大学通訳翻訳大学院の場合」『通訳翻訳研究』第8号: 355-369.
- 染谷泰正・斉藤美和子・鶴田知佳子・田中深雪・稲生衣代(2005)「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』第5号: 285-310.
- 田中深雪・稲生衣代・河原清志・新崎隆子・中村幸子(2007)「通訳クラス受講生たちの意識調査～2007年度実施・通訳教育分科会アンケートより～」『通訳研究』第7号: 253-263.
- 中嶋嶺雄(2010)「グローバル時代の大学英語教育の在り方」英語教育公開講座 基調講演 神田外語学院 2010年7月27日
- 長沼美香子(2008)「アンケートにみる日本の大学翻訳教育の現状—翻訳教育実態調査の集計と分析」『通訳翻訳研究』第8号: 285-297.
- 水野的・長沼美香子・茨田英智・山田優・河原清志(2008)「わが国の大学・大学院における翻訳教育の実態調査概要」『通訳翻訳研究』第8号: 279-283.